

な屋根のない貨車積みであった。車上で息を引き取る老人や、幼い子供も少なくなかった。停車のわずかの間に、線路の横に寝かせて手を合わせ、発車とともに永久のお別れであった。

壱蘆島で順番待ちの数日を過ごした。いよいよ引揚げの日、港に整列した。迎えの引揚船LSTの船上に掲げられた日の丸の旗は輝いて見えた。タラップを渡って船上の人となったとき、密航潜行九カ月 of 危機感が一挙に去った。このとき日本の国力の中に抱擁されている我が身を強く感じたのであった。

祖国、日本

結局、祖国は日本であった。密使として渡満したほかの三人も、それぞれ無事に帰国した。私どもの日本情勢伝達のための日本から満州への逆密航は、在満同胞の心の支えとなり、祖国日本への引揚げに希望をつなぐための一片の糧となりえたように思う。また、私ども密使の役目を務めた四人の冒険的潜行が、めまぐるしく変転する戦後の満州の中で、一人の犠牲者もたすことなく、目的を果たして、無事帰還しえたことは、

ひとえに満州在住同胞救済のための、多くの人々の祈りのおかげであったと思うのである。

私の歩んだ道

岩手県 折居 ミツ

平成七年九月、戦後五十年にあたり『大陸の花嫁』という本を見まして、もう一度五十年前を振り返ってみました。

大陸の花嫁は、多くの人は写真だけで、なかには挙式の日まで相手の顔も知らないまま結婚を決めた人もいました。彼女たちは、「大陸の花嫁」「土の花嫁」「拓土の花嫁」などともてはやされましたが、実際は「国策の花嫁」というべきものでした。昭和の初期、大陸の花嫁たちが登場した期間はおよそ十年間で、その間どれほどの女性が大陸の花嫁として満州に渡ったのか、残念ながらその数字は残されておりません。

私は昔の女学校にも入れず、百姓になるなら満州に行きたいと決心しました。

昭和十五年、十七歳の私は若手県立六原道場に友達三人と入場、そして満州花嫁の人たちと同じ学科を学び、長期訓練を受けました。退場してから、六原に残り事務をやっていた友達が、私が満州に行きたいという希望を持っていることを先生に話して、今の主人と見合いをし、横川目で結婚式を挙げていただき、満州に行きました。

年寄りたちは「知らない人と一緒に行けるか……行くな」とみんなで泣いてとりすがり、ただ母だけが「もらってくれるなら、行きなさい」と言ってくれました。気丈夫な女だと年寄りたちや父にも言われた母でした。六人兄弟の長女だった私を、母からすれば四人もいるので一人ぐらい片づけたかったのかもしれない。

満州に行くときは、皆「行くな」と言ってくれました。それでも私は、みんなを泣かせながらも満州に知らない人と渡ったのです。結婚とか、男というのを知

らずに、ただただ満州に行きたくて、昭和十六年、十八歳であこがれの満州に行ったのです。

私たちの開拓団は興安北省免渡河ジトガホロンバイル開拓騎兵隊の除隊兵の集まりで、機械農場でした。遠いので農場は見たことがありません。朝、プラウすき（犁。特に洋式のもの）をさす。唐鋤タウチでおこしたところから帰ってくれば、日が暮れるという話でした。

開拓団は、ハルビンハルビンから満洲里マンヂョウリにゆく途中の免渡河というところがあり、住宅は赤レンガ作りで、一通り十軒、三通りで三十軒ありました。開拓民は全国からの集まりでした。お正月とお盆にはみんなで集まってごちそうを作り、踊ったり歌ったり楽しいものでした。全国の踊りや歌が出るのですから。

近くに兵舎がありましたが、戦争も激しくなり、男の人たちは現地召集で次から次へといなくなるので、二家族が一つの家に入り、女と子供たちで固まって暮らしていました。

昭和二十年八月十日、満洲里から知らせがあり、

「最後の列車だ、乗れ！」の命令が入りました。満人に馬車を駆けてもらい、駅に走らせました。これが最後だとも知らず、真夏だというのに、綿入れねんねごとおむつを持っただけで無蓋車に乗り込みました。

長い長い無蓋車には、奥地からの日本人がびっしり乗っており、哈爾濱めざして出発しました。もうそのときは兵舎が空っぽだったと聞きました。興安嶺のトンネルは抜けるのに一時間もかかるといわれ、ねんねこをかぶっても煙がひどく、あのときは「ここで子供たちは最期か」と思いました。それでもみんな元気でトンネルを抜けました。齊齊哈爾^{チチハル}まで来る途中、何度か空襲があり、列車から避難するよう命令がありました。二人の子供を連れての汽車からの乗り降りは大変だったので、だれかが持ってきていた布団をかぶり降りませんでした。

齊齊哈爾の開拓会館に収容され、大きなおにぎりをいただきましたが、そのころはまだ落ち着きを見せていません。

九州の中村紀子ちゃん（九歳）がいなくなったのが、

みんなを探した最初の出来事で、大騒ぎとなりました。夕方だれかに連れられてきて、みんなで泣いて喜んだものでした。このころはまだ涙もありましたが、次々と恐ろしいことが続いて、涙もでなくなりました。

暑さと水でお腹をこわし亡くなった子供も数人いました。隣の男の子二人も亡くなったのですが、なんとかしよう、慰めようもないのです。次から次へと死人が出るのですから。そのうち兵隊に行っていた小原辰三さんが帰ってきましたが、あとはだれも帰ってきませんでした。そのころ兵隊さんは、シベリアに捕虜として送られたといいます。主人も自分の住んでいた免渡河を、シベリアに行く途中、汽車の中から見ていったそうです。

哈爾濱に着いたのは八月十五日、駅には網をかけ草をかけた汽車が、構内いっぱい、ホームいっぱい止まっています。

哈爾濱の街は、午前中は日本の兵隊さんが警備していましたが、午後からガラリとソ連の兵隊に変わりました。そしてあの「ダワイ（早く）、ダワイ」と腕を

組んで連れてゆかれる恐ろしい光景を、男も女も手をだせないまま見ていたのです。

避難民として哈爾濱の満拓公社に落ち着きました。

そこは開拓団やら義勇軍の食糧や衣料の分配をする大きな建物で、避難民がぎっしり入っていました。兵隊に行かない若い男の人が十人ぐらい事務所にいて、リュックサック一つの私たちに、ときばきと指図をしてくれました。三階建ての二階にある大きな部屋が、私たちの寝起きするところとなりました。

夜になるとソ連の兵隊が見張りに来ます。少しでもすきのある人は、連れていかれるので、子供のいない人は、子供を借りて抱いて寝ました。寝ているところをけとばしたり、軍靴のままカッカッと音をたてながらローソクを持って回ってきました。

五河林という開拓団の数人が、私たちの部屋の入口で一緒に寝るようになりました。夜になると長い着物を着て寝るのですが、ある夜、ソ連兵に連れて行かれ、帰ってこないかと思っていたらヨレヨレになって次の

朝帰ってきました。私たちの開拓団は一枚も長い着物を持っておらず、みんなもんぺでした。

みんなで、五河林の女の人が来なかったら、私たちのだれかが連れていかれたのではないだろうかと話をしました。日本に帰るまで、連れていかれた人は一人もおらず、一致団結して日本に帰るまで共同体をくずしませんでした。

昭和十九年七月ごろ、現地召集があり、男の人たちがいなくなつたので、馬百頭ぐらいを売り、現金を持っておりました。馬の多い人も少ない人も全部売り、いくらのお金かは分かりませんが、そのまま満拓公社に落ち着きました。一人で持っているのは危ないということで、小さい子供にも持たせました。一人当たり四百円だったと思います。お米・かぼちゃ・とうもろこし・んにく・味噌のおじやを一斗樽三個作り、二階に並べてみんなで食べました。一人の人からお金をもらい、なくなれば次の人からというようにしました。落としたり、落とされたとか、なくなつたとかいう人もでました。

それでもどうにか続きました。子供にも三時のおやつをもらえるようになり、みんな仲良くその満拓公社に七カ月おりました。

その一冬のうちにお産があり、死人でもました。

旦那さんが召集になり、そのときは分からなかったお腹が大きくなり「私もらしい」「私も……」と言っているうちにお産が始まり、みんなもんぺの中に産みました。年とった人が一人いて、赤チン、麻糸、ハサミで、みんなその人がとり上げてくれました。自分の産んだ子供を「起こしてちょうだい」と言っておさえてもらい、もんぺの中の赤ん坊のへその緒を切るのです。そのうち難産の人もいて、そのへんにあった戸を集めて囲いを作り、子供たちには見せないようにしましたが、ハサミのチョキンチョキンという音は聞こえてきました。旦那さんのいないところでお産をする女の気持ち、何と言っているのか、身の縮む心地でした。そして親が死ねば、赤ん坊も助かりませんでした。ある日、急に、痛い痛いと言った長男の隆一（四歳）が胸を押さえて飛び上がります。お医者さんに見せたいと

願っても、門を開けてくれません。飛び上がる子を一晩中抱いて朝になったら、唇は真っ青になっていました。病院におんぶして行ったら、もうだめだと言われました。お父ちゃんのないところでこの子が死んでゆく。お父ちゃんを知っているんだらうかと「隆ちゃんお父ちゃんは……」と聞いたら、「お父ちゃんなんかいないよ、母ちゃんのバカ、バカ」と叫んだのです。どこからこの声が出るのだらうと思う声で叫んで、それが最後でした。なんと言えよいいのか、あの夜どうにかしてやれなかったのか……と今も責めてしまいました。三日後、二男の正二も後を追うように逝ってしまいました。

昭和二十年十二月六日・九日と、二人の子供がいなくなつたのです。腕の中が広く感じるというか、悲しいというか、とても眠れず吉田栄子さん親子のところにしがみついで寝ました。お母さんと九歳の女の子でした。一晩だけで死んだ子供を手放せないから、満拓公社のどこかに埋めてくださいと、男の人たちに頼んで埋めてもらいました。二男は霊柩車に乗せました。

小さい子供の上に男の人が、女の人の上に男の人が、ぼんぼんと投げられてどこにゆくのか分からず、時間になれば霊柩車がくるのです。お線香をたいてゆくのですけど、だれも泣いておりません。涙がでないのです。

二人の子供を亡くしたあとすぐ発疹チフスとなり意識不明になりました。胸が苦しい苦しいと言ったらしく、岩手の伊香チヨさんがどのようにして手に入れたのか、三センチ厚さの馬肉を胸いっぱい当ててくれたということでした。私はその人のお陰で助かったらしいのです。足が冷たい冷たいと言ってはお湯で洗ってもらい、男の人たちに「足より顔を洗ってもらいなさい」と冷やかされたことも覚えています。幾日寝たのか分かりませんが、階段の手すりにもたれながら、上ったり下ったり歩く練習をしたことを覚えています。まるで生まれ変わったかのように、新しい気持ちで、子供たちの亡くなったことも忘れていられました。薄情な母親……ごめんなさい。隆一、ごめんなさい。正二、子供を二人も亡くしたのに自分は死ねない、ごめんな

さい、ごめんなさい。

薬も飲まず、注射もしないで、元気になったのでした。

一冬のうちに生き残った人は、二分の一になりました。枕を並べて、おもに発疹チフスで亡くなりました。枕を並べて、みんなのいる所から離れて寝かされました。ご飯を持って行くときは、ひざまでズボンを上げて持って行きました。しらみがうつるからとのことでした。それでもご飯を運んでくれるだけ有り難いことでした。

春とともに哈爾濱の街にも平和らしい日々がきました。そろそろ馬のお金もなくなるから働きに出ようということになり、日本の兵舎から満人がとった醬油を、私たちが買って満人に売る仕事をしました。そのとき男の人たちが三人、女の人たちが七人いました。一升びんに詰められた醬油を男の人は九本、女の人は五本と割り当てられ、それを売りさばき、決められた場所に集合するのです。二人ずつ歩くことに決められました。

満人だけが住んでいる二十道街というところは、電車に乗り、馬車のはげしく通るロータリーを渡って行かなければなりません。男の人でも小さい人には、九本持つというのとはとても無理でしたので、そのロータリーを越えるまで、私は二本だけ持ってあげました。二十道街には満人らしい作りの、満人だけのアパートが二十棟あり、その一つのアパートに、三、四人の家族で約三千人住んでいるということでした。やはりここでも匪賊が恐ろしくて門をひとつにしたのだといいます。

そのうち自分のお得意先も決まり、結構売りさばけるようになりました。人の顔を見て出し分のお金より二十円もうけて、油まんじゅうを二個買って松花江のほとりで、吉田栄子さんと楽しみながら食べるのが日課となりました。

そうして歩いていくうちに、日本人の女の人が大きなお腹をして「いつ日本に帰れそうですか」と涙を浮かべて問いかけてきました。夫は召集されたとのこと。発疹チフスで倒れていたところを満人に拾われ、気が

ついたときにはこうなっていたという、クーニャンの服を着せられた若い女性……。何人もの人が同じことを言っていました。「私たちみたいになかったのでしょうか。そんな大きなお腹をして、日本の話などできないでしょう」と私は叫びました。考えてみれば、共同生活をしていればこそ強いとも言えるのです。自分一人ならどうなっていたことでしょう。改めて周りにいたみなさんのお陰と感謝しています。それにしても、あの人たちはどうなっているのでしょうか。

今度は哈爾濱市内の街角に立ち、日本酒を売ることになりました。危ないからというので二人のコンビを作り、私はいつも吉田さんとでした。ここは一番人通りの多いところで、満人、ロシア人、兵隊さん、ロシア人の女の兵隊さん、頭に白い布を巻きつけたインド人、日本人が通ります。毎日五、六本のうち、二、三本は売れました。いつものようにお酒を五、六本並べて立っていると、ソ連の兵隊が靴音も勇ましくカツカ

ツとききました。とたんにお酒を一本とり、後も振り向かないでカッカツと角を曲がって行ってしまいました。どうしよう、どうしようと二人で話しても、どうにもなりません。しばらくして、誰かがドカンと一升びんを置きました。見ると先程の兵隊がまたも後を振り向かないで、カッカツと軍靴の音を響かせて、人混みの中に消えて行きました。栓も抜かれていないそのままの一升びんに、狐につままれたようで、吉田さんはニヤツと笑いました。

赤い夕日の沈むころ、品のある日本人の老夫婦が、人通りの少なくなった街角を散歩していました。ああ、この姿こそ人間の幸せでなくて、なんであろう。このどさくさの中によく無事で……声はかけられなかったけれど、見えなくなるまで見送りました。吉田さんと二人で、いつか私たちもこのようなときがくるかしらと、主人やら日本の人々を思い浮かべて話しました。醤油売りから帰ってきたら、沢柳今千代さんが玄関の所に立っていて「折居さん、私にあんたの肉をちょうだい」と言って、私の腕を引っ張ります。そして、

何という歌だったか忘れましたが、夕日の沈むころ、故郷を思う歌を厚いレンガにもたれながら歌っていました。「お父ちゃん、お父ちゃん」と言って甘ったるい声を出し、お父ちゃんなしでは生きてゆけないような人でした。故郷を思い出す歌を口ずさんだその夜、うめくことなく、わめくことなく死んでいったあの人。どんなにお父ちゃんを思って死んでいったことか、女同士でも胸をえぐられる思いが今もします。

いよいよ日本行きの引揚げ命令がきました。

飛び上がるほど嬉しい反面、後ろ髪をひかれる思いがしました。自分だけ帰る悲しさ。子供を残し、自分だけ哈爾濱をたちました。

壺蘆島に着くまで四十数日かかりました。あっちに投げられ、こっちに投げられ、そして無蓋車で座るところもなく、雨も降ってきます。老爺嶺という所にきたとき歩かされ、途中で野宿しました。木と木の枝に風呂敷をしばりつけ、頭だけ霜がかからないようにしました。四十数日間の食料(カンパンなど)を持ち、

私は高橋タケさんの四人分と自分の分をリュックサックにつめて、その上に高橋さんの末の子を乗せて歩きました。

あるとき、機関士らしい人が女をださないと汽車を動かさないと言ったので、ある女の人が「どうせ汚れた身だから、皆さんのお役にたてば」と言っていてたそうです。

そのうちにも死人が出ました。山形県の勝田ヨシ子さん（二十歳）もその一人。走っている無蓋車から、亡くなってすぐ、まだ温もりが残っている遺体を毛布にくるみ、一、二、三とかけ声をかけ、外に投げられました。

大の仲良しだった宮城県の吉田栄子さんが、防寒ずきを敷いても何をあてても出血がひどくて、壺蘆島に着くなり、男の人たちがいろいろな手続きをしているうちに、病院に肩を組んで連れて行きました。病院にたどりつき、診ていただいたら「会わせる人がいたら今のうちに会わせなさい」と言います。子供を連れて走ってきたときにはもう亡くなっていました。子供

は死んだ母親には取りすがらないで「おばちゃん」と言って私に飛びつきました。いくら死んだとはいえ、一度はお母さんに取りすがるだろうと思っていたのに。私はただぼう然としていました。そのときから一緒に暮らしました。

子供と一緒に自分たちの部屋に帰ってみると、吉田さんのリュックサックが空っぽになっていました。みんなでもらったのだということでした。海を越えれば夢にまで見た日本、故郷には親もいます。なぜ死んだ人のリュックサックの中の物が欲しいのでしょうか。めばしい物は何にもありません。洗いざらしの下着、靴下、そんな物しかないのに……。今はおちぶれた避難民かも知れないけれど、かつては「奥さん」と呼ばれ「そうでございますわ」などと言っていた人々が。人の心のあさはかさ。「子供もいることだし、返してください」と私は言いました。

船に四泊五日目。昭和二十一年十月中ごろ佐世保にきました。しかし、何か信じられない気分でした。生き残った人は三十八人。免渡河を出るときは六十

七人でした。大人八人、子供二十一人が帰れませんでした。

そこで一週間いろいろと調べられ、その間は船にいました。船の食事はおじやで、皮をむいていない赤い大粒の小麦に、大きな煮干しがそのまま、サツマイモの茎が入っていました。それでもおいしく感じられ、五十二年たった今でも開拓者である私は、サツマイモの茎を見るとあのころを思い出し、おじやを食べたくなり作って食べています。

無蓋車では見かけませんでしたが、船の甲板に出ている人を見ると、ロシア人の女性と結婚した男性が三人いました。故郷に近づくにつれて心配もあるのか、ひそひそと話をしていました。その人たちには子供もいました。

ようやく船からあがったその日から、DDTや赤チンをベタバタとつけられ、やはり一週間ぐらい検査されました。そしていよいよ品川まで汽車に乗り、品川で解散し、それぞれの故郷に帰りました。岩手に帰るのは五人でした。

佐世保でお金とお米を支給されましたが、そのお米と生節を交換してむしゃむしゃ食べたことを忘れません。仙台に来たら白い駅弁でしたが、途中は赤い皮のある小麦の弁当でした。

吉田玲子ちゃんは七歳でした。お母さんが亡くなったから私の側を離れず、船の甲板で星を見ながら、「お母さんは死んでも、お屋さんになって、いいことをしても悪いことをしても、玲子ちゃんを見ているのよ」と話しました。自分自身も「星になって母ちゃんを見守っていてちょうだい」と、子供二人の顔を思い浮かべて、最後の船の上から大陸との別れを叫びました。

岩手の家に帰る前に、宮城の玲子ちゃんのお父さんの実家を探し求め、小原辰三さんと奥さんのかつ子さんと私と玲子ちゃんが古川駅に降りました。いろいろ聞いて探して歩き、やっとお兄さんの家までたどり着きました。そのお兄さんが帰らないうちには家に入れない……と言われました。そのうち玲子ちゃんのお母さんの実家からも人がきました。

一晚泊してもらおうことになり、いろいろと話をしました。日本に帰ってきた実感はなく、自分たちだけ生きてきたのが申し訳なくて、亡くなった人たちのおおわびをしなければならぬ苦しいものでした。

朝になると玲子ちゃんは、私の側を離れず、トイレに行くにもあとをつけて歩きました。そこのおじいさんはしばらく泊まってくれと言ってくれましたが、兄嫁さんはすっかりおさえこみ「おばちゃん、おばちゃん」と泣き叫ぶ玲子ちゃんに負けそうになり、涙を流していました。私は逃げるようにして別れてきました。

主人の実家に着いたら、お母さんは七月に亡くなり、お兄さんと妹とがおりました。子供はどうしたと言われましました。何と返事をしてよいのか、苦しいものでした。

実家に行ったら、本家のおじいさんに「かわいい子供だった。子供をだせ」と言われました。だれもが言いたい、叫びたい言葉ではなかったでしょうか。くやしいのです。私がいたらなかったばっかりに……。

主人からシベリアで捕虜として通訳をして元気であるという便りももらいました。二度便りがあり、お母さんが亡くなったこと、子供を亡くしたことを返信しました。

昭和二十三年三月、主人が帰ってきました。落ち着く暇もなく、満州で一緒だった人たちが、開拓者として立ちあがろうと岩手に来ていました。二十四年から、当地後藤野に住みつきました。

主人は組合長として出歩き、私は牛二十頭と子供を任せられ働きました。満州では男の子二人でしたが、こちらにきてからは女の子が二人生まれ、長女は東京の人と結婚して、次女が家におります。

平成二年六月二十三日、ホロンバイル慰霊の旅に行きました。満拓公社は今は学校として使われておりましたが、学校が始まる前だったので全部見せていただくことができ、自分の入っていた部屋も、寝起きした場所も主人に見てもらいましたが、子供を埋葬した場所は分かりませんでした。私は大きな声を出して泣き

だしました。申し訳なさと悲しさに、人の迷惑も考えず大きな声で泣きました。仲間と一緒にお念仏を唱えました。

自分たちの住んでいた所にも行きましたが、山の墓地だったけれど分ならず、見当をつけてお念仏を唱えました。野菊の咲くころ、子供の手をひいて何度か来たのに、何十年もたってしまっただけでぜんぜん分かりませんでした。

すべては変わっております。立ち直ってみんな明るい顔をして働いておりました。大陸はカラリと晴れわたり、街も今では何事もなかったような落ち着きをみせ、皆さんは笑顔で迎えてくれました。

平成九年四月二十日、地元北上市の慶昌寺において供養会を行い、全国から十四人参加、お勤めをしていただきました。引揚げ後から七回目の供養会となり、引き揚げてくるときは、六歳から八歳だった子供たちも六十歳前後、私は七十三歳、主人は八十一歳となり皆高齢となりました。

何のために戦争をしたのか、何のためにあんなに苦

しんだのか……。二度と戦争はするものではない」と改めて感じました。世界の人はみな仲良くあるべきなのです。

地獄から這い上がって故郷へ

岩手県 竹内 嗣 欣

海外居住の動機

昭和三年二月十五日、私は長野県下伊那郡上郷村飯沼に生まれた。

昭和十二年の暮れ、父が支那事変に召集され、支那大陸にて戦闘をして、昭和十四年秋ごろ除隊帰還してきた。

自作地が少ないので、小作にて農業をしていた。當時国策により満州開拓移民が盛んに行われていて、大陸を見てきた父は、狭い日本の小作農業では物足りず、満州へ行くことを思いたち、昭和十五年満州国吉林省舒蘭ジョラン水曲柳スイキョリウ開拓団の第三次移民団要員として、一年